

関数論 2 小テスト No.1 (2011年9月27日, 10月4日提出予定)

__年16組__番 氏名_____

明日9月28日はお休みです。

問1

(1) $z^4 = -1$ を解け。

(2) $C: z = e^{i\theta}$ ($\theta \in [0, \pi/2]$) とするとき、 $\int_C z^2 dz$ を求めよ。

(3) $r > 0, a \in \mathbf{C}, n \in \mathbf{N}$ とするとき、 $\int_{|z-a|=r} \frac{dz}{(z-a)^n}$ を求めよ (n で場合分けが必要)。

(4) $\int_{|z-2|=1} \frac{dz}{z}$ と $\int_{|z-1|=2} \frac{dz}{z}$ を求めよ。

- $z^n = c$ を解くのは苦手などと言ってはいけない。
- 本当は冪乗 e^z の形でなく、 $\exp z$ と書くべきなのだが...
- $|z-a|=r$ は $z = a + re^{i\theta}$ ($\theta \in [0, 2\pi]$) というパラメーター曲線だとみなすこと。
- $e^{i\theta} = \cos \theta + i \sin \theta$. 原点中心、半径1の円周(単位円) $|z|=1$ と、 x 軸の正方向と角 θ をなす半直線との交点。
 θ が高校数学で良く現れる角度のとき、具体的な値が求まる。
 $e^{i\pi/2} = i, e^{i\pi} = -1, e^{2ni\pi} = 1$ ($n \in \mathbf{Z}$) などなど
- $(e^z)^n = e^{nz}, \frac{1}{e^z} = e^{-z}$.
- $a \in \mathbf{C} \setminus \{0\}$ に対して、 $\int e^{a\theta} d\theta = \frac{e^{a\theta}}{a} + C$ (C は積分定数).

解答 (2011/10/4)

- (1) 与えられた $c \in \mathbf{C}$ に対して、 $z^n = c$ を解く必要が生じることがある。 $c = 0$ の場合は $z = 0$ で簡単だから $c \neq 0$ とすると、 $c = \rho e^{i\varphi}$ ($\rho > 0, \varphi \in \mathbf{R}$) となる ρ, φ が取れる。 $z = r e^{i\theta}$ ($r > 0, \theta \in \mathbf{R}$) とおくと、

$$\begin{aligned} z^n = c &\iff r^n e^{in\theta} = \rho e^{i\varphi} \\ &\iff r^n = \rho \quad \text{and} \quad e^{in\theta} = e^{i\varphi} \\ &\iff r = \sqrt[n]{\rho} \quad \text{and} \quad e^{i(n\theta - \varphi)} = 1 \\ &\iff r = \sqrt[n]{\rho} \quad \text{and} \quad \exists m \in \mathbf{Z} \quad \text{s.t.} \quad n\theta - \varphi = 2m\pi \\ &\iff r = \sqrt[n]{\rho} \quad \text{and} \quad \exists m \in \mathbf{Z} \quad \text{s.t.} \quad \theta = \frac{\varphi + 2m\pi}{n} \\ &\iff \exists m \in \mathbf{Z} \quad \text{s.t.} \quad z = \sqrt[n]{\rho} \exp\left(i \frac{\varphi + 2m\pi}{n}\right). \end{aligned}$$

最後の式は m について周期 n であるので、連続する n 個取ればすべてのものをつくす。ゆえに

$$z = \sqrt[n]{\rho} \exp\left(i \frac{\varphi + 2r\pi}{n}\right) \quad (r = 0, 1, \dots, n-1).$$

...というような公式を丸暗記してもしようがない。 n 乗すると、原点からの距離は n 乗、偏角は n 倍になるので、 n 乗して $\rho e^{i\varphi}$ になる数として、 $\sqrt[n]{\rho} \exp\frac{i\varphi}{n}$ がぱっと浮かぶようになって、後は円周上に n 個、円周を n 等分するように並ぶ ($e^{\frac{2\pi i}{n}}$ をかけていくと全部求まる)、と覚えるのがお勧め。(値より先に図が浮かんで来るのが望ましい。) $-1 = e^{\pi i}$ だから、一つの n 乗根として、 $z = e^{i\pi/4} = \frac{1+i}{\sqrt{2}}$. 後は i をかけて

$$z = \frac{1+i}{\sqrt{2}}, \frac{-1+i}{\sqrt{2}}, \frac{-1-i}{\sqrt{2}}, \frac{1-i}{\sqrt{2}}.$$

あるいは偏角が $\frac{2\pi}{4} = \frac{\pi}{2}$ ずつ増えて、 $e^{\pi i/4}, e^{3\pi i/4}, e^{5\pi i/4}, e^{7\pi i/4}$.

- (2) $z = e^{i\theta}$ より $dz = ie^{i\theta} d\theta$ であるから、

$$\int_C z^2 dz = \int_0^{\pi/2} (e^{i\theta})^2 \cdot ie^{i\theta} d\theta = i \int_0^{\pi/2} e^{3i\theta} d\theta = i \left[\frac{e^{3i\theta}}{3i} \right]_0^{\pi/2} = \frac{(e^{3\pi i/2} - e^0)}{3} = \frac{-i - 1}{3}.$$

(別解) $\frac{z^3}{3}$ が z^2 の原始関数であることに気がつくと、

$$\int_C z^2 dz = \left[\frac{z^3}{3} \right]_{e^{i0}}^{e^{i\pi/2}} = \left[\frac{z^3}{3} \right]_1 = \frac{i^3 - 1^3}{3} = \frac{-i - 1}{3}.$$

- (3) $|z - a| = r$ のパラメーターづけとして、

$$\varphi(\theta) := a + r e^{i\theta} \quad (\theta \in [0, 2\pi])$$

が取れる。 $\varphi'(\theta) = ire^{i\theta}$ であるから、

$$\int_{|z-a|=r} \frac{dz}{(z-a)^n} = \int_0^{2\pi} \frac{1}{(a+re^{i\theta}-a)^n} \cdot rie^{i\theta} d\theta = \int_0^{2\pi} \frac{1}{r^n e^{in\theta}} \cdot rie^{i\theta} d\theta = \frac{i}{r^{n-1}} \int_0^{2\pi} e^{i(1-n)\theta} d\theta.$$

$n \neq 1$ のとき

$$\int_{|z-a|=r} \frac{dz}{(z-a)^n} = \frac{i}{r^{n-1}} \left[\frac{e^{i(1-n)\theta}}{i(1-n)} \right]_0^{2\pi} = 0 \quad (e^{i(1-n)\theta} \text{ は } 2\pi \text{ を周期としているから}).$$

(別解) $\frac{d}{dz} \left(\frac{1}{1-n} \cdot \frac{1}{(z-a)^{n-1}} \right) = \frac{1}{(z-a)^n}$. つまり原始関数が存在するので、閉曲線上の線積分は (始点 = 終点なので) 0.

$n = 1$ のとき

$$\int_{|z-a|=r} \frac{dz}{(z-a)^n} = \int_{|z-a|=r} \frac{dz}{z-a} = i \int_0^{2\pi} d\theta = i \cdot 2\pi = 2\pi i.$$

(注意) $\frac{1}{z-a}$ は $\mathbb{C} \setminus \{a\}$ では原始関数を持たない! 少し工夫をすれば、次のシナリオで計算できる。簡単のため、平行移動して $a = 0$ とする。 $\int_{|z|=r} \frac{dz}{z} = 2\pi i$ が目標。 $\mathbb{C} \setminus (-\infty, 0]$

では、 $\text{Log } z = \log |z| + i \text{Arg } z$ が $\frac{1}{z}$ の原始関数である。これを使って極限操作すると、 $\log r + i\pi - (\log r + i(-\pi)) = 2\pi i$ になることが導ける。